

南住吉遺跡(MN02-6次)発掘調査現地説明会資料

大阪市教育委員会・(財)大阪市文化財協会

2003年6月29日

南住吉遺跡は、大阪市住吉区南住吉を中心とする南北約1km、東西約1.5kmの範囲にある縄文時代から江戸時代にかけての遺跡です(図1)。遺跡のほぼ中央部を横断する長居公園通りは日本書紀にも登場する磯齒津路と考えられており、その脇を流れる細江川は中世の和歌集にその情景の豊かさが詠まれるなど、古代以来の要衝であり、名所でもありました。また、東の河内地方や西の大阪湾岸地域に比べてやや標高が高く(標高約4~10m)、大阪平野を南北に貫く上町台地の南部に位置しています。

今回の調査地は南住吉遺跡の南西端に当たります。調査の結果、古代から近世にかけての遺構と細江川の支流を確認しました。

調査地中央部に見られる細江川支流は、上町台地を形づくる地層を削るように流れていました(図2)。川を埋めていた土砂の中からは古墳時代の須恵器や土師器、弥生土器、縄文時代の鎌などが見つかりました。また、流れの方向から南西と東南からの2方向の流の合流点付近に当たることが分かり、川底に直径約30~50cmほどの流木(写真2)が見つかったことから、上流(南東)側には林あるいは森が存在していたことをうかがわせます。

古代の遺構には、奈良時代と考えられる掘立柱建物1棟のほか、柱穴が数多く見つかりました(図3・写真1)。掘立柱建物は、南北長約7.4m(4間)×東西長約3.7m(2間)で、ほぼ南北を向いています。

また、掘立柱建物より新しく、古代から中世以前とみられる柵が見つかりました。川の流れの方向とほぼ一致していることから、川と生活の場所との境をなしているのではないかと考えられます。

細江川支流は中世にかけて埋まり、中世から現代(府営住宅が建つ前)までの長い間、耕作地として利用されたことが明らかになりました。

江戸時代の遺構としては、井戸や土取り穴が見つっています(図3・写真1)。井戸は両側に長方形の穴が掘られていることから、滑車で水をくみ上げる構造をもった井戸であったと推定されます。

このように、今回の調査では縄文時代以降の遺物や古代の遺構が見つかり、遺跡の範囲がさらに西側に広がることが明らかとなりました。また、調査地の西側には止々呂支比売命神社が、やや離れて北西側には住吉大社、荘厳浄土寺などの寺院が存在することから、今後その関連性を解明する上で本遺跡西側の調査が重要であるといえるでしょう。

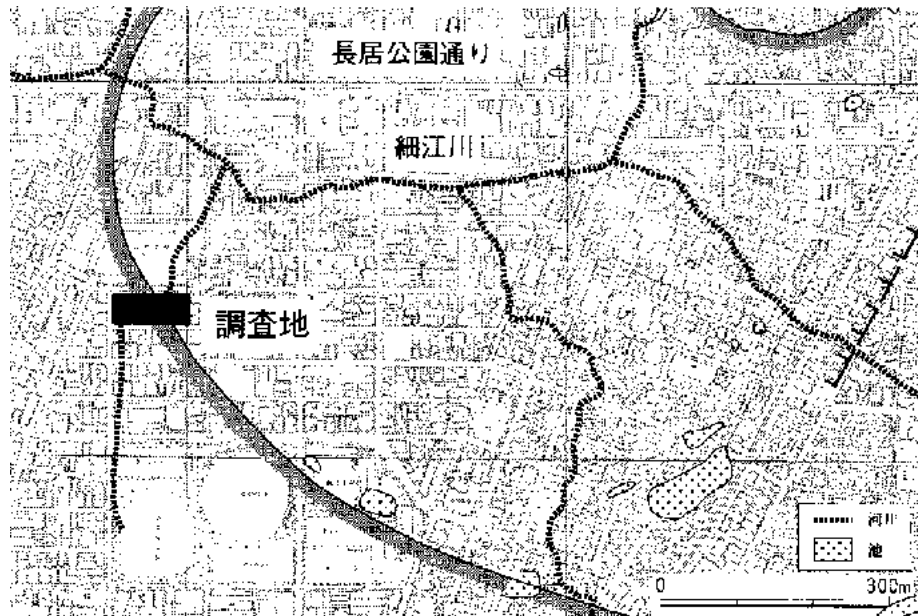


図1 調査地の位置と南住吉遺跡の範囲

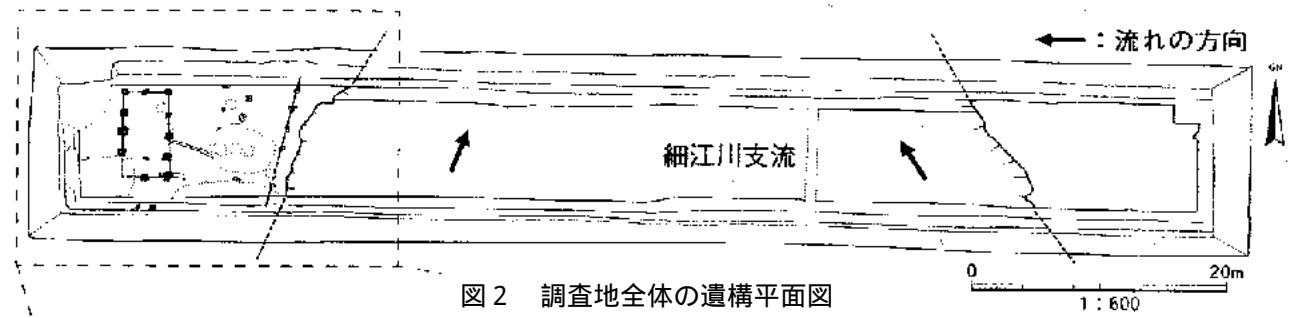


図2 調査地全体の遺構平面図

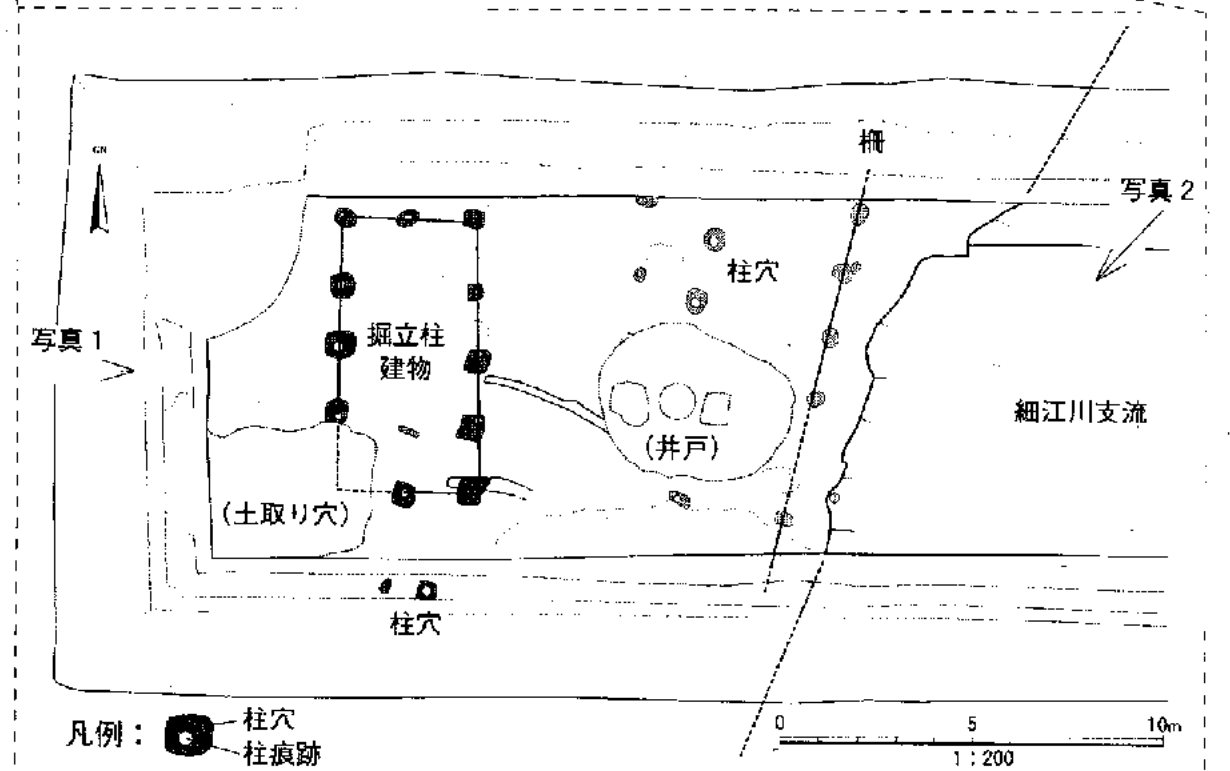


図3 西側部分の遺構平面図



写真1 掘立柱建物と柵(西から)

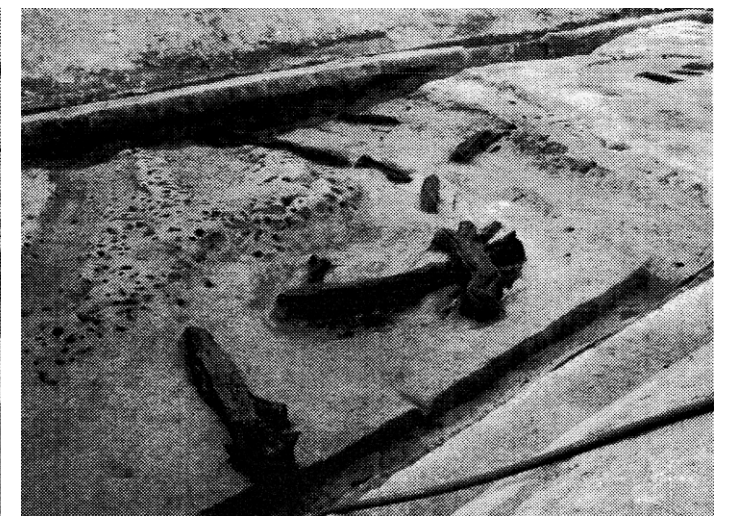


写真2 流木の状況(北東から)